

★「武蔵国府寺」創建伽藍の復元（訂正版2－8）

川瀬健一

8) 古式伽藍の改造例を考察する

以上の検討によって、諸国「国分寺」の中には、既存の古式の回廊の中に塔がある伽藍配置を持った「国府寺」などを改造して、新式の回廊の外に塔がある伽藍配置を持った「国分寺」とした例があるだろうことが予想された。

ではそうした改造はどのようになされたのだろうか。

実際の諸国「国分寺」伽藍を検討する前に、古式の伽藍配置と新式の伽藍配置の比較を行い、両者の違いを明確にしたうえで、古式を新式に改造すると、どのようになるかを想定しておきたい。

① 伽藍配置の歴史的検討

従来さまざまな論者によって古代寺院の伽藍配置の歴史的変遷とその変遷の意味を検討する作業がなされてきた。この中で比較的好くまとまったものが、森郁夫による「わが国古代寺院の伽藍配置」（1991年「学叢」13号所収）である。この論文は多くの事例の伽藍配置の図面を掲載し、それぞれの伽藍配置の違いを、特に金堂と塔との配置関係を中心にして考察し、併せてそれぞれの伽藍配置の成立年代の確定と、その背後にあった宗教的政治的背景を考察したものである。

この論文に依拠しながら、ここに載せられている代表的伽藍の図面を考察するとともに、森が考察の対象としなかったこと、たとえば「金堂前面の前庭の広さ」や「中門と南門（南大門）との距離」「寺域の広さと伽藍の関係」などについての考察しておきたい。

なぜなら古式の寺院を改造し、巨大な七重塔を造る際に、回廊内の広さや回廊と南門との間の距離や、回廊も含む伽藍中枢と寺域との間の広さなどが問題になると思われるからである。そして金堂前の前庭の広さは、金堂が仏像を礼拝する施設であるため、金堂を中心とした新式の伽藍の場合には、この前庭はさまざまな大規模な宗教的行事を行う場でもあるため、一定の広さを必要としているからだ。

森は古代寺院の伽藍配置の歴史的変遷は次のようになるとした。

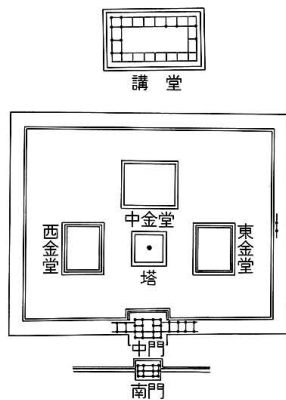
- 1：塔を伽藍の中心に置く飛鳥寺式（6世紀末か？）⇒
- 2：回廊内に塔・金堂を縦置きする四天王寺式など（7世紀中ごろ）
回廊内に塔・金堂を横置きする法隆寺式・川原寺式（7世紀中ごろ）⇒
- 3：回廊内に双塔を置く薬師寺式（7世紀末）⇒
- 4：回廊外に双塔を置く大安寺式（8世紀初）

回廊内に塔・金堂縦置き式にはこれ以外に山田寺式があり、回廊内に塔・金堂横置き式にはこれ以外に、法起寺式と観世音寺式があり、回廊内に双塔を置くものには大官大寺式

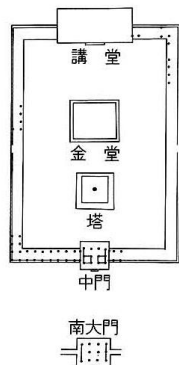
さらに回廊外に双塔を置くものには東大寺式が加えられよう。そしてこの歴史的変遷の前には飛鳥寺式のように、塔を伽藍の中心に置くものがあり、これは釈迦の仏舎利を安置するという意味で、現身の仏を信仰の中心に置く形式であり、続く回廊内に塔・金堂を縦置きする形式と横置きする形式は、金堂という理仏（釈迦如来・薬師如来・阿弥陀如来などの教理上造られた諸仏）を具現化した仏像を重視しこれを礼拝する堂を伽藍の中で重視してはいるが、現身の仏を礼拝する塔と同等としたもの。そして回廊内に双塔を置く形式は、塔も重視しながらも金堂を中心に置き、理仏を具現化した仏像の礼拝がさらに中心となった形式で、回廊外に塔を置く形式は、塔はまったく伽藍の飾りとなり、金堂という理仏を具現化した仏像を重視しこれを礼拝する堂を伽藍の中心に据えた形式であると、信仰の在り方と合わせてその歴史的変遷を説明した。

これを図面を見ながら、金堂前面の前庭の広さの変遷を中心にして考えてみよう。

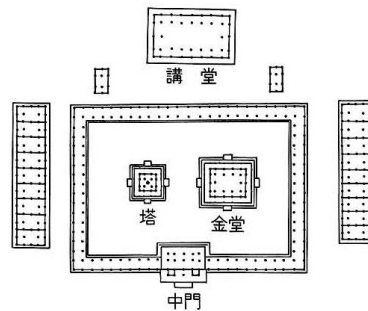
まず森の論考にある典型的な伽藍形式の図面を、その発生順に並べて比較してみよう。



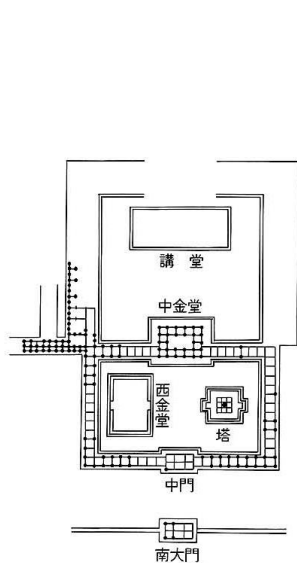
挿図1 飛鳥寺伽藍配置図
1 : 2500



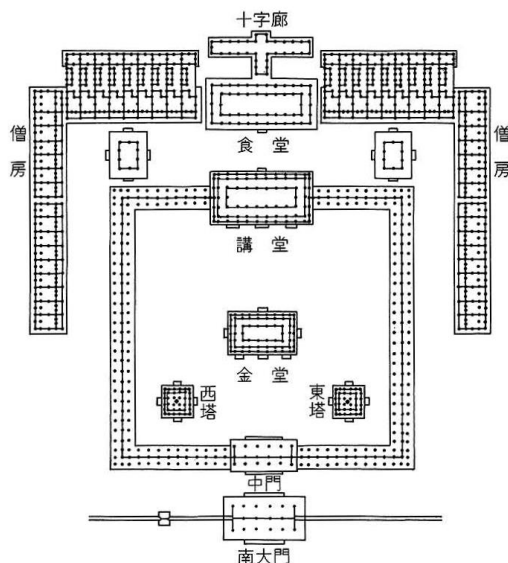
挿図2 四天王寺伽藍配置図
1 : 2500



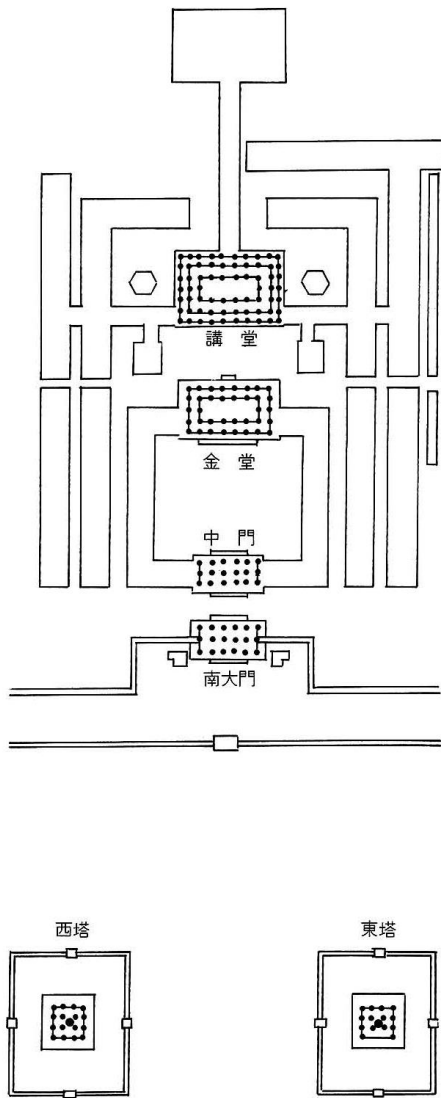
挿図4 法隆寺 1 : 2500



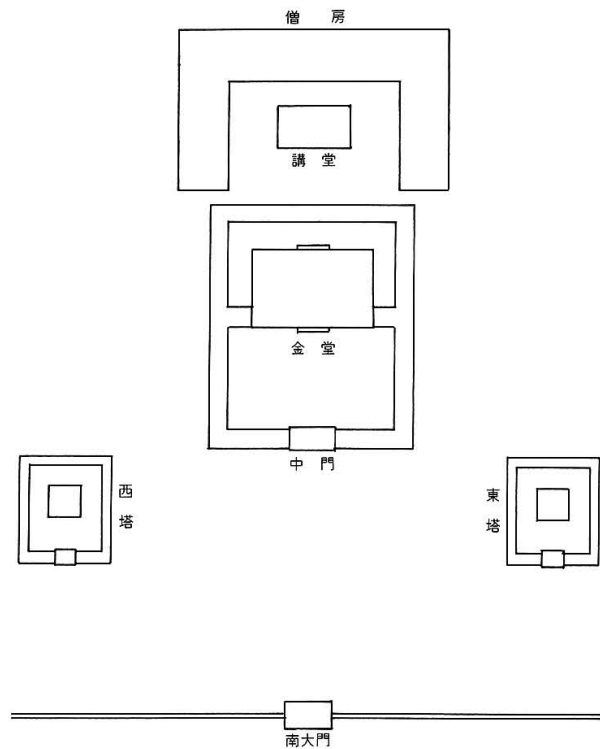
挿図5 川原寺伽藍配置図 1 : 2500



挿図7 薬師寺伽藍配置図 1 : 2500



挿図9 大安寺伽藍配置図1：2500



挿図10 東大寺伽藍配置概念図1：5000

飛鳥寺式⇒四天王寺式⇒法隆寺式・川原寺式⇒薬師寺式と、回廊の中に塔のある古式の伽藍形式を比べてみると、薬師寺式に至って初めて、金堂の前庭の面積が飛躍的に増大していることに気が付くだろう。それまでの、飛鳥寺・四天王寺・法隆寺・川原寺の各形式においては、金堂の前庭の面積は小さく、塔のそれとも同等で、回廊の中の狭い空間に過ぎなかった。それが双塔式の薬師寺に至って、伽藍の大きさも回廊の大きさも飛躍的に大きくなるとともに、金堂が回廊内の中心を占め、その前庭は巨大な面積を持つように変化したのである。

そしてこれはさらに、8世紀に出現した、塔が回廊の外に置かれた新式の、大安寺式や東大寺式となると、その伽藍の巨大さと共に、回廊がほぼ金堂だけを取り囲む、いわば金堂院という形式となって、金堂前庭が、回廊内という神聖な領域の全域を占めるよう変わったのだ。

金堂前庭の広さという観点で伽藍形式の変遷を追うと、こうなる。

さらに続いて、回廊内と外を区切る中門と寺域の外との間を区切る南門との間の空間の広さを比較してみよう。

これは多少の変化はあるが、回廊の中に塔がある古式の伽藍形式では一般的に、中門と南門との間の空間は狭いのに対して、8世紀の回廊の外に塔が置かれた形式である東大寺式となると、中門と南門の間の空間が巨大となり、ここに巨大な塔が出現した。

中門と南門との間の空間で言えば、古式の回廊内に塔がある形式では狭く、新式の回廊外に塔がある形式では広くなるといえよう。これは古式では重要な建物が全て回廊内にあるため、中門と南門の間に何も置く必要がないから空間が狭かったが、新式では回廊内にあった塔が回廊の外に置かれ、中門と南門の間に置かれたからである。

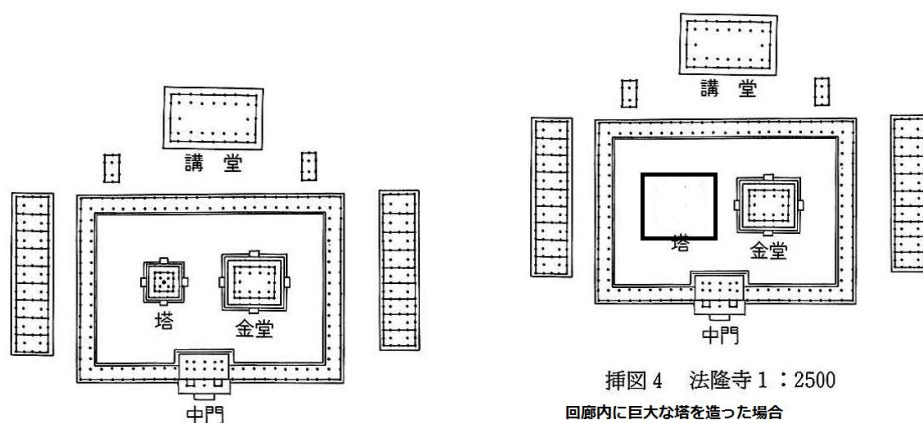
塔が信仰の対象ではなく、寺院の飾りとなるとともに、伽藍の形式にこうした変化が生まれたわけだ。

ただし新式の伽藍形式でも大安寺式の場合は、古式の伽藍と同様に、中門と南門の間の空間は狭い。これは大安寺では、塔が回廊の外どころか、南門の外のさらに外郭に押し出されてしまったことによる。

② 古式伽藍の新式への改造

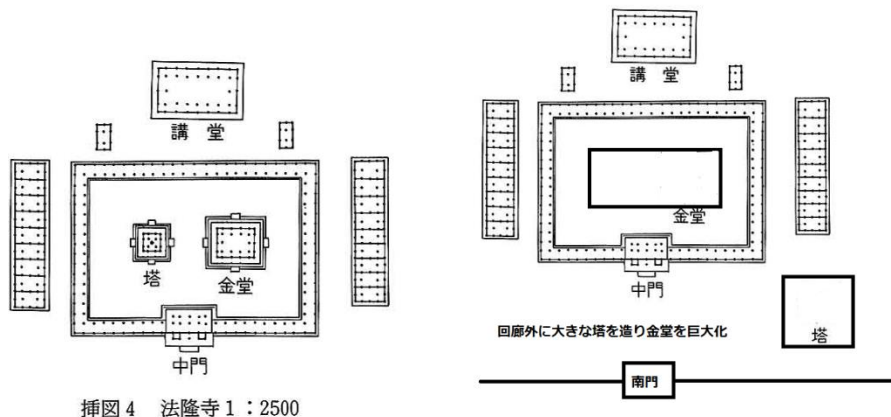
では古式の回廊の中に塔がある伽藍を、回廊の外に巨大な七重塔を置く形式に改造したらどうなるであろうか。

まず回廊内に塔と金堂が並置された伽藍の場合（法隆寺式）を考えてみよう。



挿図4 法隆寺1：2500

- a) **法隆寺式改造1**：まず最初は、回廊内の広さが十分な場合。この場合は、回廊内の塔を解体して基壇を拡大し、そこに大きな七重塔を建てるということになるだろう。この場合は元の場合に比べて、塔の大きさが金堂に比べてかなり大きめになる。



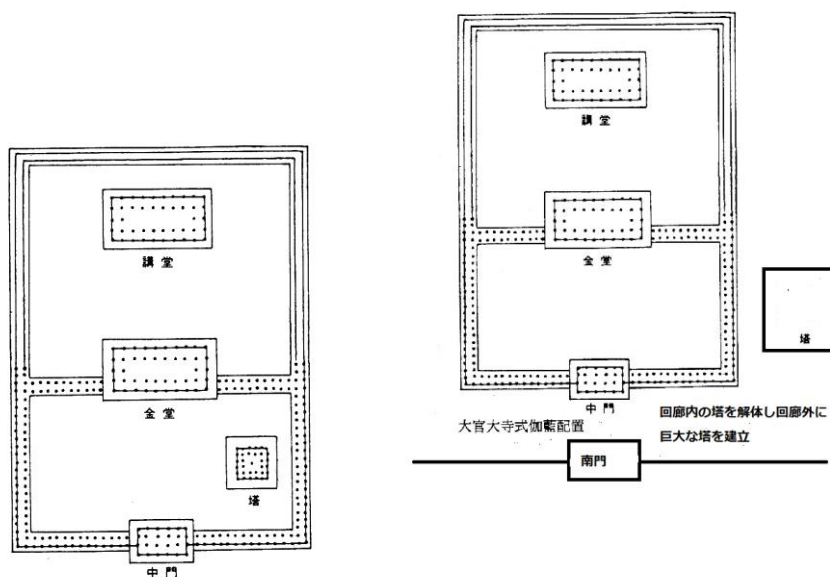
b) **法隆寺改造2**：回廊内の空間が狭くて巨大な七重塔を建てられないが、中門と南門との間の空間が広い場合。この場合は、回廊内の塔と金堂を解体して、回廊外の中門と南門の間に巨大な七重塔を造り、これと釣り合うように、回廊内に大きな金堂を建立する。

こうした例が考えられる。

要は改造する場合に、回廊内の空間がどれだけの広さを持っているかであり、さらには、中門と南門の間の空間がどれだけの広さを持っているかである。そしてさらには回廊内の空間も狭く、中門と南門の間の空間も狭いが、回廊の両側の空間が広い場合には、回廊の西側または東側に巨大な塔を置くという例も考えられよう。

たとえば大官大寺式の場合でこうした例があれば、次のようになる。

c) **大官大寺式改造1**：

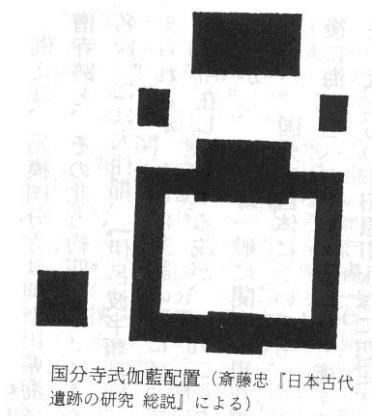


大官大寺式加藍配置 (奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館常設展示解説。『大和の考古学』による)

回廊の南側、中門と南門の間の空間が狭いので巨大な塔を置けないが、回廊の両側に広

い空間がある場合には、回廊の西側または東側に巨大な七重塔を置くことがあり得るだろう。この際は回廊内の塔を解体して基壇も削り、回廊の東西いずれかに新たに巨大な七重塔を建立する。

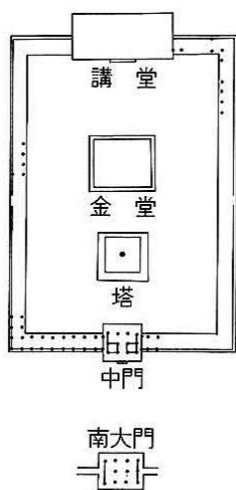
このようにして改造した場合は、なんと国分寺式とされている伽藍形式と相似形であることか。



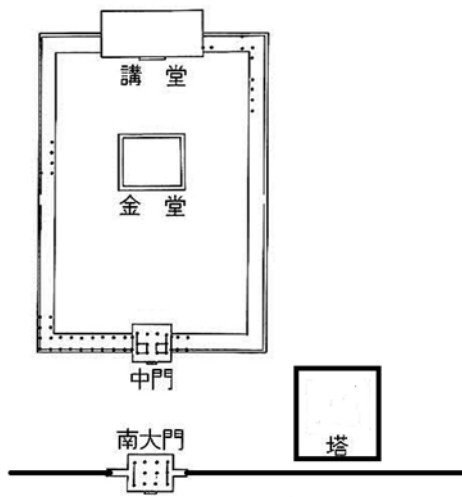
国分寺式伽藍配置 (斎藤忠「日本古代遺跡の研究 総説」による)

さらに同じく縦長の伽藍だが、塔と金堂とが南北に並んでいる四天王寺式を改造した場合を考えてみよう。

c) 四天王寺式改造 1



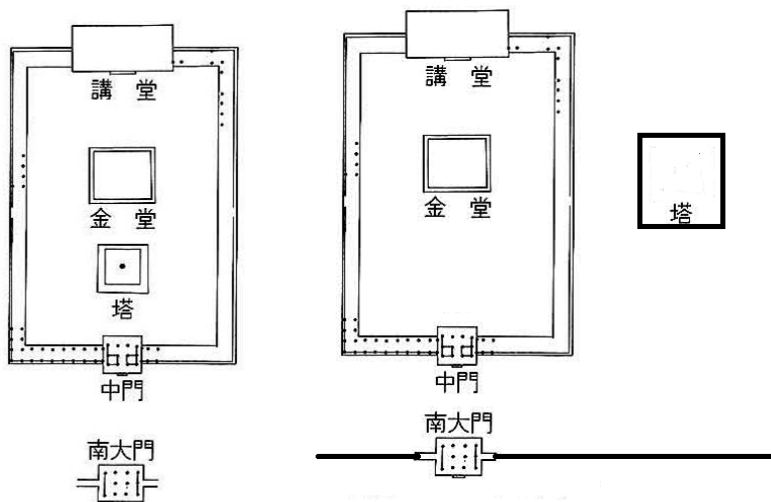
挿図 2 四天王寺伽藍配置図
1 : 2500



挿図 2 四天王寺伽藍配置図
1 : 2500

中門と南門との間の空間が広い場合である。回廊内の塔を解体し、中門と南門の間の空間に巨大な七重塔を建てる。こうすると新式の東大寺式ともかなり似通った伽藍配置ができあがることになる。

d) 四天王寺式改造 2



挿図2 四天王寺伽藍配置図
1 : 2500

挿図2 四天王寺伽藍配置図
1 : 2500

これは中門と南門の間の空間が狭くて巨大な七重塔を建てられないが、回廊の東西の横の空間が広い場合、回廊内の塔を解体して、回廊の横に巨大な七重塔を建てた場合である。これだとかなり国分寺式の伽藍配置に似てくる。

③ 国分寺式伽藍の成り立ち

国分寺式伽藍とは、考古学者の斎藤忠が名付けたもので、先に見たように、金堂院の東西いずれかに塔を置く形式であり、これは天平宝字3（759）年11月9日の「国分二寺の図を天下の諸国に頒ち下す」との命に沿って造られたものと考えられてきた。

たしかに図面が頒布されたのだろうが、実際には、国分寺式伽藍配置といわれる寺院は、こうした、大官大寺式や四天王寺式などの、回廊内に塔を置いた古式の伽藍であるが、縦長な回廊と伽藍地を持った寺院を、「頒布された図面に基づいて」改造して、中門と南門の間の空間が狭かったために、回廊外で、回廊の東西の何れかに巨大な七重塔を造った場合を指しているのではないかと思われる。そして大事なことは、全国の国分寺が国分寺式伽藍ではなく、その一部に過ぎず、それは先の図面を頒布した前後という問題ではないと思う。ここでは法隆寺式と大官大寺式、そして四天王寺式のみ改造を試みてみたが、他の場合もやってみれば、それぞれ特徴的な国分寺が出来上がることであろう。

森郁夫も先の論文「わが国古代寺院の伽藍配置」の末尾で次のように記している。「ただ鎮護国家を標榜して各国に造営された国分寺の伽藍配置は一定していない。今後の重要な課題である」と。この専門家の一言は、国分寺伽藍が一つのマスタープランによって造営されたのではなく、各地にすでにあった古式伽藍を持った寺院を改造して造営されたものであった可能性を示している。

以上の古式の伽藍改造の試みを踏まえて、26ヶ国の国分寺伽藍の再検討に入ろう。

（2016年11月21日）